HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	挫折しているのは誰か
Author(s)	杉野, 勇
Citation	北海道大學文學部紀要, 47(3), 105-123
Issue Date	1998-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33731
Type	departmental bulletin paper
File Information	47(3)_PL105-123.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学部紀要 47-3 (1998)

挫折しているのは誰か*

杉野　勇

Ⅰ．95年SSM調査に於ける「挫折経験」データ

社会学に於ける「社会階層と社会移動に関する全国調査」，通称SSM（全国）調査は，1995年に第5回を数えた。この調査は21歳から70歳の男女について，学歴・職業・収入・階層意識などに関する豊富なデータを収集し，人々の階層や社会移動，種々の意識についての様々な分析を行っている。また，95年調査では，SSMとして初めて男女同数サンプリングが実施され，漸く本格的な男女比較分析が可能となった。そうした中で本稿では，人々の「挫折経験」とも云うべき，SSM調査としては一風変わった質問項目についてやや基礎的な分析を行ってみたい。この質問項目は95年SSM調査のB票に収められており，以下の様な質問文となっている。

「あなたのこれまでの人生で，次に示すような経験がありましたか。あったことをすべて選んでください。

(ア) 希望どおりの進学ができなかった

(イ) 学校を終えて，希望した職業や会社に進めなかった

(ウ) 会社や役所で，希望どおりの昇進ができなかった

(エ) 続けたかった仕事をあきらめて，転職や退職をした

* この分析は1995年SSM調査研究の一環として行われたものである。データの使用及び結果の公表にあたっては1995年SSM調査研究会の許可を得た。

(オ) 希望した転職や再就職ができなかった
この中にはない
わからない

質問文中に「挫折」と云う表現は無いが，必要に応じて表記簡略化の為に(ア)を進学挫折，(イ)を就職挫折，(ウ)を昇進挫折，(エ)を不本意転退職，(オ)を転職・再就職挫折と呼ぶ事にする。

使用するサンプルは新制学校卒業者に限定，即ち旧制学校出身者と調査時在学者を除き，また(イ)以下の項目では「現在までずっと無職」である者を除外した。(ウ)以下では必要に応じて初職が自営業であるものも除いた。従って各分析項目に於いて使用するサンプル数は必ずしも同一ではない。

II.「帰無仮説」と単純集計

さて，こうした「挫折経験」はどう云った人々に多いと考えられるだろうか。

例えば進学について考えてみると，高等学校への進学率が男女共に90%を超えてから既に20年以上経つ（文部省『学校基本調査』）。短大を除く大学進学率について見ても，1995年で男性40.7%，女性22.9%（短大は24.6%），1975年（調査時40歳の人が20歳の年に当たる）で男性40.4%，女性12.5%（短大は19.9%）に上る。こうした状況を考えると，高校は「行くのが普通」，大学卒学歴も何等特別なステイタスではなく，そうした中等・高等学校へ進学しなかった者ほど挫折感・剝奪感が強いと云う推測がなされても不自然ではない。また同様に，男性よりは進学・就職等の機会に乏しい女性の方がそうした感覚を多く持っているのではないかとの見方も可能である。

初職就職や昇進に関しても，長らく学歴社会が続いて来たと言われる日本に於いては，高学歴者よりも低学歴者の方が，また男性よりも女性の方が「有利な就職先やポスト」に恵まれない事は言う迄も無く，そうした層の人々の挫折感が強い事が推測される。

(エ)の不本意転退職や(オ)の転職・再就職挫折は(ア)から(ウ)の項目とは若干性格を異にするとも考えられる。(ア)から(ウ)が性別に無関係な，もしくはmale-centric（男性中心的）な発想に基づいていると見做され得るのに対して，(エ)の不本意転退職は，結婚退職・出産退職する事の多い女性を念頭に置いているかの様な質問項目である。(オ)の転職・再就職挫折も，結婚もしくは出産時に一旦労働市場から退出した女性が子育て期を終えて再び就職しようとしてもなかなかその希望が適わないと云ったイメージを喚起させる。と云う事はやはり男性よりも女性の方がこれらの挫折感が強いのではないかと予測される。

ここで単純集計を見てみると，進学挫折があると答えた人は34.1%（サンプルは在学者を含む新制学歴者：男性1,031，女性1,241），就職挫折があると答えた人は25.3%（新制学校卒業者：男性1,000，女性1,220)。昇進挫折があると答えた人は6.2%（新制学卒者で自営業以外の初職経験者：男性956，女性1,172)。同サンプルで不本意転退職経験者は14.8%，再就職挫折経験者は9.5%となっている。比率の高い順に，進学挫折，就職挫折，不本意転退職，再就職挫折，昇進挫折となっており，最も高い進学挫折でも34.1%と，三分の一強の人しかそうした経験は無かった。5つの項目の組合せで見てみても，新制学卒者で自営業以外の初職経験者2,128人中，最も多いのが「5つの項目いずれも該当しない」（5項目全てに「無い」と回答した者）カテゴリーで，全体の41.6%と圧倒的多数を占める。次に多いのは進学挫折のみに該当した者16.6%，3番目が就職挫折のみに該当した者の9.2%，以下5%を越えるカテゴリーは，進学・就職挫折経験者8.0%，不本意転退職経験者6.9%となっている。意外にも，極めて多くの人がこうした挫折経験を持っていないと云う事が分かった。勿論，これらの数字を高いと見るか低いと見るかは分析者の先入観に依存するところであるが。

5つの各挫折経験項目間の関係を見てみると，ペアワイズの相関係数は最大で0.212（進学挫折と就職挫折)，最小で0.015（進学挫折と不本意転退職)

とそれ程高くは無いが，2×2 クロス表で関連の有無を調べると，殆どのペアが χ^2 検定で高度に有意な関連を示す。そのいずれもが，一方の項目に「有る」と答えた者の方が他方の項目にも「有る」と答える傾向が高い事を示している。この関連が有意にならなかったのは，10 の組合せのうち進学×不本意転退職，就職×不本意転退職の二つだけである。5 項目で因子分析を行うと固有値 1 以上の因子が 2 つ抽出される。因子負荷量の高さから，第 1 因子は進学・就職・昇進の 3 つの項目によって主に構成され，第 2 因子は不本意転退職・転職再就職の 2 つの項目によって主に構成されていると言える[1]。第 1 因子は「進学→就職→昇進」と云う，類型的な「出世」に関るものと解釈する事が出来，それに対して第 2 因子は「転職・退職→転職・再就職」と云う，ライフコースの再編成に関るものと解釈する事が出来る。

これらの相関が高いと云う事は，次の事を意味している。即ち，「前段階で挫折を経験していれば，次の段階でも挫折を経験する比率が高い」と云う事である。例えば，進学で挫折を経験したものは，そうでないものに比べて初職入職時にも挫折を経験する可能性（比率）が有意に高い，と云った様に。

実際データで確認してみると，初職入職時に挫折を経験した者は，進学に於いて挫折を経験していない者で 18.5%，進学挫折経験者では 37.6%に達する。無論この結果は χ^2 検定で高度に有意（$p=0.001$）である。また，昇進挫折の経験比率は，進学・就職共に挫折を経験していない者，就職でのみ挫折を経験している者，進学でのみ挫折を経験している者，進学・就職共に挫折経験のある者ではそれぞれ，2.6%，4.7%，7.0%，21.3%となり，これも高度に有意（$p=0.001$）な差となる。不本意転退職，再就職挫折に於いても基本的には同様の結果が確認される。「富める者は益々富み……」では無いが，「挫折せる者は益々挫折す」と言わざるを得ないかの様な結果である。この結果からも，客観的に不利な社会的位置にある者が挫折を経験していると推論するのが自然であると思われる。恵まれた地位にあるものは，イレギュラーな挫折は経験する事もあるだろうが，「一貫して挫折し続ける」と云う事は考えにくいからである。

III. 性・学歴・世代等による差異

さてこの節では，それぞれの項目毎に，挫折経験の分布を性別・学歴別・世代別または職業（従業上の地位）別に見てみよう。

III−1. 希望どおりの進学ができなかった

進学挫折経験と性別のクロス表を見ると，男性で「経験有り」の比率は約36.3%，女性では約32.2%となり，ポイントの落差はそれ程大きくは無いとは言え，χ^2検定の結果は$p=0.043$で5%水準で有意な差となる。挫折経験者が比較的少なかったと云う事も意外であったが，男性の方が女性よりも経験比率が高いと云う事はそれ以上に意外な結果であると言えよう。男性よりも女性の方が各種進学率が低く，しかもそれは単に能力的な差を表しているのではなく，女性には男性に無い社会規範的な障壁，例えば「女の子には余り高い学歴を付けない方が良い」とか「女の子は例え成績が良くても中央の有名大学に行かせるよりは地元の国立大学に行かせる方が良い」と云った親や周囲の意識が存在している事を考えるならば，女性の方が進学に纏わる挫折経験が多くても不思議は無い筈である。しかしこの単純なクロス表はそうした予想を裏切っている。

調査時20代・30代・40代・50代・60代の世代別に見ると，20代から50代迄は全て挫折経験比率が31.9%から33.6%の間にあり，60代のみが41.0%と他の世代に比して若干高い値を示しているが，しかしχ^2検定の結果は$p=0.258$で，有意な差とは言えない。男女に分けて世代差を見ても，やはり有意な差は観察されない。

中学卒・高校卒・短大高専卒・大学卒・大学院卒の学歴別に見ると，最も高学歴な大学院卒のカテゴリーで挫折経験比率は最高値をとり，以下，中学卒，大学卒，高校卒，短大高専卒の順になる。大学院卒はサンプル中の0.92%，実数で21人と，かなり特殊なカテゴリーではあるが，その半数以上（11人）が進学に関する挫折経験があると答えているのは意外である。このクロス表

の χ^2 検定の結果，５％水準で有意な差であると言える。

表－1　学歴別の進学挫折経験比率　$p=0.028$

学　歴	中　学	高　校	短大・高専	大　学	大学院
人　数	453	1,178	230	390	21
経験比率	38.4%	33.1%	28.3%	34.4%	52.4%

しかし，これを男女に分けて行ってみると，際立った相違が存在している事に気が付く。男性に関しては学歴差がほぼ消えてしまっているのに対して，女性では１％水準で有意な差が発生する。男女共に大学院学歴者に於ける比率が最も高い点は共通しているが，しかしこれは特に女性の側でサンプル数が少ないので余り信用出来ない数字でもある。対照的なのは，２番目に来るのが男性の場合大学学歴者であるのに対し女性では中学卒学歴者であり，女性の大学学歴者は女性内部で最も挫折比率が低くなっている。

表－2　男女毎の学歴別進学挫折経験比率

学歴	p	中　学	高　校	短大・高専	大　学	大学院
男性	0.475	35.9%	35.1%	30.0%	38.3%	52.6%
女性	0.010	40.4%	31.7%	28.0%	23.8%	50.0%

女性の場合は，大学院学歴者を除いては，挫折経験比率は丁度学歴の低い順（＝教育年数の短い順）になっている。即ち，「客観的に社会的資源に恵まれない層ほど挫折経験が多い」と云う解釈にそれなりに適合的な結果である。それに対して男性の場合は，僅かに大学卒の比率が他のカテゴリーよりも高い。男性の高学歴者と云う，女性に対して，また低学歴者に対して２重に有利な立場にあると思われがちなカテゴリーで挫折経験が多いと云うのはやはり意外と言えるのではないだろうか。

Ⅲ－2．希望した職業や会社に進めなかった

次に，Ⅲ－1のサンプルから在学者を除いたサンプルについて，就職挫折経験と性別のクロス表をとってみると，挫折経験有りの比率は男性28.2%，女性23.0%で$p=0.005$，有意水準1%で男性の方が経験比率が高い事が分かった。ここでも進学挫折と同様，挫折経験比率は男性の方が女性よりも有意に高いのである。

初職の従業上の地位を「経営者・役員」(経営)，「常時雇用されている一般従業者」(常雇)，「臨時雇用・アルバイト・派遣社員」(臨雇)，「自営業主・自由業者」(自営)，「家族従業者・内職」(家族)，「一度も職業に就いた事が無い」(無職)に分けて見てみると，経営者・役員層，自営層，臨時雇用者層，家族従業者層の順で挫折経験比率が高く，その差は10%水準で有意である。

表－3　従業上の地位別の就職挫折経験比率（全体）　$p=0.061$

地位	経営	常雇	臨雇	自営	家族	無職
人数	9	1,845	128	61	146	31
比率	44.4%	24.2%	32.8%	34.4%	28.8%	22.6%

サンプル数が少ないとは言え，経営者層の挫折経験が多いと云うのはこれもまた直観に反する結果と言える。因みにこの2重クロス表を性別でコントロールして，男女それぞれについて初職カテゴリーと挫折経験の有無のクロス表を検定すると，男女いずれについても関連は否定される。即ち，男性内部，女性内部では，初職のカテゴリーによって挫折経験比率が違うとは必ずしも言えないのである。

表－4　従業上の地位別の就職挫折経験比率（男性のみ）　$p=0.346$

地位	経営	常雇	臨雇	自営	家族	無職
人数	6	851	27	40	72	4
比率	50.0%	27.3%	40.7%	37.5%	27.8%	25.0%

表－5　従業上の地位別の就職挫折経験比率（女性のみ） $p=0.217$

地　位	経　営	常　雇	臨　雇	自　営	家　族	無　職
人　数	3	994	101	21	74	27
比　率	33.3%	21.5%	30.7%	28.6%	29.7%	22.2%

これを見ると，家族従業者カテゴリーを除く全ての初職カテゴリーで，挫折経験比率は女性よりも男性の方が高い。更に次の表を見ると分かる様に，初職カテゴリーの分布は男女ではっきりと異なる。

表－6　初職従業上の地位の男女比　$p=0.001$

	全　体	経　営	常　雇	臨　雇	自　営	家　族	無　職
男性	45.05%	66.7%	46.1%	21.1%	65.6%	49.3%	12.9%
女性	54.95%	33.3%	53.9%	78.9%	34.4%	50.7%	87.1%

サンプルの構成がほぼ男：女＝45：55であるのを基準として考えると，経営・自営はそれよりも男性の比率が高く，臨時雇用・無職は女性の比率の方が多い。常雇，家族従業者はサンプルの性構成とそれ程変わらない。挫折経験比が高いのは先ず男性の多い経営・自営であり，その次に女性の多い臨時雇用が来る。そしてもう一つの女性の多いカテゴリーである無職層は挫折経験比が最も低い。即ち挫折経験と初職カテゴリーの関連は，性別を媒介としたものであると見做す事が出来る。全体的に女性よりも男性の方に挫折経験が多く，職業構成が男女で異なる故に，男性の多い職業（従業上の地位）カテゴリーで挫折経験が多いと云う結果になっているのである。

因みに学歴別に挫折経験比率を見ると，男女込み，男性のみ，女性のみの3つの場合いずれに於いても有意な関連が否定された。

世代間の差異については，50代28.9%，30代26.8%，60代25.3%，40代23.8%，20代20.6%の順となる（$p=0.062$）。10%水準で有意とはなっているものの，数値の差はそれ程大きくはない。これを男女に分けた上で世代差を見ると実に対照的な結果が得られた。男性のみの場合有意水準1%で世代

差が認められた。

表－7　世代別の就職挫折経験比率（男性のみ）　$p=0.003$

世　　代	20　代	30　代	40　代	50　代	60　代
人　　数	143	194	326	244	93
比　　率	18.9%	31.4%	24.5%	35.7%	29.0%

これに対して女性のみの場合には，全ての世代で21.8%から23.5%の間に数値が収束し，$p=0.993$ と，完全に世代差が否定された形になっている。それ故に男性の間での世代差が全体の結果に弱められた形で反映したのである。

III－3．希望どおりの昇進ができなかった

更に，初職が自営業である者を除いて，昇進挫折経験に関して男女の差を見ると，男性8.7%・女性4.2%（$p=0.001$）でここでもやはり男性の方が多い。

世代間では，50代8.1%，60代7.5%，30代6.7%，40代5.3%，20代3.8%（$p=0.088$）となり，有意水準は10%程度で高くないものの，50代・60代に挫折経験者が多い。これは年功序列的な昇進制度をイメージすれば納得の行く結果である。男女毎に世代差を見ると，女性では世代差は有意にならず，男性に於いて5%水準で有意となる。また，ここでもやはり，20代を除く全ての世代で，女性よりも男性の方が挫折経験が多い。

表－8　世代別の昇進挫折経験比率

世　代	p	20　代	30　代	40　代	50　代	60　代
全　体	0.088	3.8%	6.7%	5.3%	8.1%	7.5%
男　性	0.017	2.1%	10.1%	7.9%	12.2%	9.8%
女　性	0.657	5.1%	4.1%	3.0%	4.8%	5.5%

学歴別では，大学院卒，大学卒と云った高学歴者に昇進挫折経験者が多い。

表－9　学歴別の昇進挫折経験比率　$p=0.001$

学　歴	中　学	高　校	短大・高専	大　学	大学院
人　数	414	1,139	220	341	14
経験比率	6.0%	5.4%	2.7%	11.1%	14.3%

しかし男性だけに限定すると，全体的な傾向は殆ど変化しないものの，$p=0.198$ となって χ^2 検定をパスしなくなる。そこで，このサンプルの女性に大学院卒学歴者はいないので院卒のカテゴリーを除外した上で女性のみについて学歴と挫折経験のクロス表をとってみると，大卒＞中卒＞高卒＞短大高専卒の順になり，大卒高学歴女性の挫折経験比率が高い（$p=0.038$）。

表－10　男女毎の学歴別昇進挫折経験比率

学歴	p	中　学	高　校	短大・高専	大　学	大学院
男性	0.198	6.6%	7.9%	3.6%	11.9%	14.3%
女性	0.038	5.6%	3.5%	2.6%	9.1%	－

男女いずれに於いても高学歴者の昇進挫折が多く，結果の有意性を考えると取り分け女性についてそれが当てはまると言える。また，同じ学歴カテゴリーで比較すると，いずれのカテゴリーに於いても女性に於ける挫折経験比率よりは男性に於ける挫折経験比率の方が高く，「女性よりも男性の方が挫折経験が多い」と云う傾向がここでも確認される。

初職とのクロス表をとってみると，初職カテゴリーと挫折経験との相関は認められない。これは男性と女性に分けてみても同じである。現職とのクロス表では逆に高度に有意な相関がみられ（$p=0.001$），挫折経験が多い順に，常雇 8.9%・経営 7.3%，臨時雇用 4.4%，無職 4.1%，自営 2.5%，家族 2.2% となる。しかしこれを女性だけにすると，経営・常雇が高い事には変わりは

ないが，結果が有意ではなくなる。男性だけにすると5％水準で有意となる。

表－11　現職別の昇進挫折経験比率

	p	経　営	常　雇	臨　雇	自　営	家　族	無　職
男性	0.045	7.7%	10.1%	6.3%	1.8%	0.0%	11.8%
女性	0.345	6.3%	6.2%	4.3%	4.2%	2.5%	3.1%

男性無職層で比率が高いのが目立つが，それ以外では経営・常雇と云ったカテゴリーに挫折経験が多い。

Ⅲ－4．続けたかった仕事をあきらめて，転職や退職をした

不本意転退職については，性別で見ると，男性14.4%対女性15.0%，$p=0.707$ となり，関連は完全に否定されたかに見える。しかしこれを世代でコントロールすると，20代・30代は女性が有意に高く，40代はほぼ同じ，50代は有意水準5％で男性が高く，60代は有意ではないが男性の方が比率が高い。即ち，若年層では女性に不本意転退職が多く，高年齢層では逆に男性の方が多いのである。20代・30代の女性の不本意な転退職はやはり結婚や出産と云ったライフイヴェントに関連したものと考えられ，それに対して50代・60代の男性に於いては，「これまでの会社・仕事でもっと働き続けたかったのに」止む無く退職や転職をせざるを得なかったと云う経験が多く含まれているのではないかと推測される。

表－12　世代別の不本意転職・退職経験比率の男女差

世　代	20　代	30　代	40　代	50　代	60　代
男　性	7.9%	11.1%	15.5%	18.3%	18.3%
女　性	14.8%	21.1%	15.5%	10.7%	11.0%
p	0.058	0.006	0.983	0.013	0.172

性別と不本意転退職経験の関連が無い様に見えたのは，こうした世代によ

る「男女差」の傾向の異なり（違い方の違い）が相殺されてしまった為である。

因みに，単純に世代と挫折経験とのクロス表をとると，20代の11.7%から30代の16.7%の間に全ての数値が収まり，世代差は有意ではない。

学歴別では，院卒で7.1%と低く，短大高専卒で16.4%と高い以外は，全て14.5%前後となり，相関は否定される。男性のみで学歴差を見ると，$p=0.391$で有意ではないが，中卒18.2%＞大卒14.2%＞高卒13.8%＞短大高専＝院卒7.1%の順になる。女性だけでは（院卒カテゴリーを除去），これも有意ではないが，短大高専17.7%＞高卒15.5%＞大卒14.8%＞中卒11.6%となる。

男女毎に，現職の雇用形態との関係を見ると，男女共に現職が臨時雇用・パート・アルバイトの層で過去に不本意な転職や退職を経験しており，男性では無職，自営と続く。女性では家族従業者，無職と続いている。

表－13　現職別の不本意転職・退職経験比率の男女比較

	p	経　営	常　雇	臨　雇	自　営	家　族	無　職
男性	0.001	12.8%	12.4%	50.0%	16.7%	9.5%	29.4%
女性	0.001	6.3%	9.0%	21.8%	8.3%	18.0%	15.3%

これは，不本意な転職や退職の結果が，現在の臨時雇用・パート・アルバイトだったり，無職だったりすると考えれば，ごく自然な結果であると言えるかも知れない。

Ⅲ－5．希望した転職や再就職ができなかった

最後に，転職・再就職での失敗について見てみよう。

先ず性別で見てみると，この項目への該当者の比率は男8.8%に対し女10.1%となるが，その差は有意ではない（$p=0.316$）。

単純に世代でクロス表をとっても，30代11.0%＞40代11.0%＞20代8.2%＞50代8.1%＞60代6.4%，$p=0.160$で有意ではない。

学歴別でも有意な差は確認されず，短大高専10.9%，院卒0%以外は8.5%から9.7%の間に集まっている（$p=0.635$）。これを男性だけで見ても大差無く，女性だけで見ても短大高専11.5%＞高卒10.8%＞大卒9.1%＞中卒7.3%ではあるが差は有意にならない。

現職の従業上の地位で分けると，臨時雇用13.6%＞無職11.0%＞家族9.9%＞常雇8.7%＞経営8.2%＞自営3.7%（$p=0.018$）の順になり，このクロス表は5%水準で有意である。男性のみだと臨時雇用，無職，家族，常雇・経営，自営の順に高く，更に高度に有意になる。女性のみの場合には，臨時雇用，常雇，経営，無職，家族，自営となるが，その差は有意ではない。

表－14　現職別の再就職挫折経験比率の男女比較

	p	経　営	常　雇	臨　雇	自　営	家　族	無　職
男性	0.001	7.7%	7.7%	31.1%	2.6%	23.8%	25.5%
女性	0.573	9.4%	11.1%	12.5%	6.3%	8.1%	9.1%

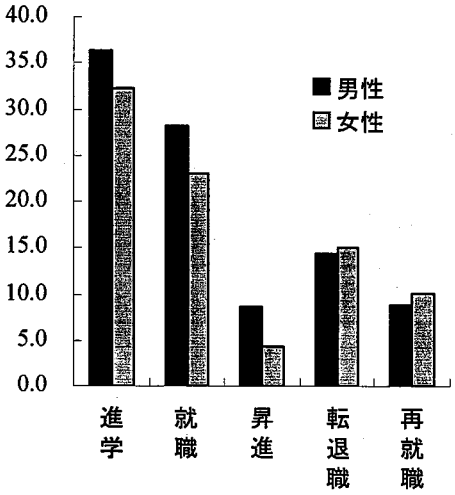
即ち，希望した転職や再就職に関しては，臨時雇用や無職，家族従業者の男性に取り分け挫折経験が強いと云った程度である。

Ⅳ.「経験」か「期待水準」か

前節で見て来た様に，当初の予測に反して，女性よりも男性の方が，また低学歴者よりも高学歴者の方が，そして場合によっては経営者等の従業上の地位の高い者の方が，挫折経験が多いと云う事が分かった。この様に，「客観的に見て」学歴や職業的地位と云った社会的資源に恵まれない層よりも，比較的そうした社会的資源に恵まれた層の方が挫折経験比率が高いと云うのは一体何故なのだろうか？　先に設定した「帰無仮説」は，一体何処が間違っていたのだろうか？

そもそもこの質問文は，「こうした経験が有りましたか」と云う尋ね方をしている。「経験」と云うと，あたかもその本人には帰責出来ないところの出来

事の様にイメージし易いかも知れない。そのイメージを増幅させると，挫折経験と云った客観的事実が分布しているかの様に思われてしまう。しかし，「希望通りの進学（就職・昇進……）が出来なかった」と云う事実には，先ずもって「本人の希望」と云う主観的要素が前提として大きく関っている。

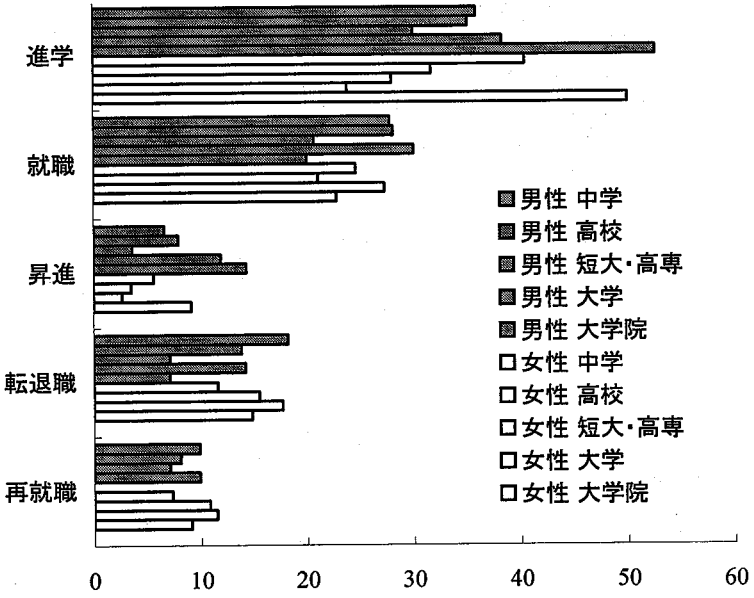


図－1　挫折経験の男女差

例えば，進学や職業に纏わる社会的環境・条件が女性にとって不利であり，女性達自身も自らその様な状況を認識しているが故に「最初から過度な期待はしない」，と云う事態は十分に考えられる。そして，女性達のそうした初期の期待水準が低ければ，それが裏切られる事も少なくなると云うのは当然の事である。これに対して男性の場合には，初期の期待水準を抑制する様な社会的メカニズムが女性よりも弱い為に，相対的に高い期待水準が抱かれるが，しかしそうした相対的に高い期待水準の分布に比して社会的資源が稀少である故に，その期待が裏切られると云う事も多くなるかも知れない。

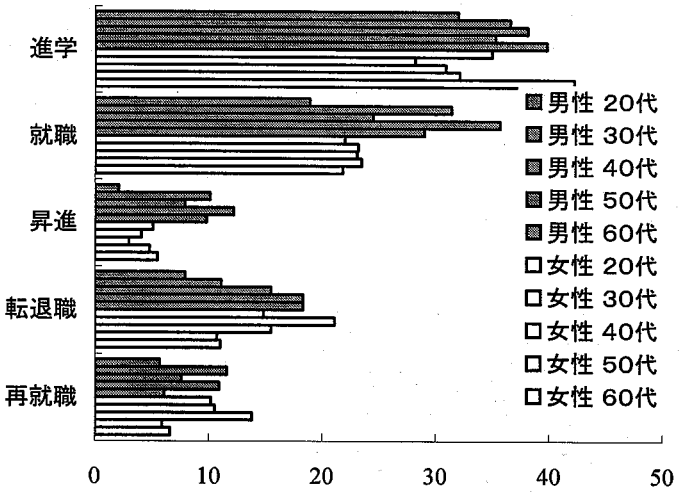
学歴別に見た時にカテゴリー間の差が有意になった進学挫折・昇進挫折についても，いずれも最も比率が高いのは大学院卒業者であり，２番目に中卒

者もしくは大卒者，続いて高卒者，最後に短大・高専卒業者となる。中卒者については，客観的に社会的資源に恵まれない者が挫折経験を持つのではないかと云う当初の帰無仮説的な解釈が当てはまりそうではあるが，高卒学歴者よりも大卒・大学院卒の方が挫折経験が多いと云うのは，性別同様，「高い期待が抱かれる」カテゴリーの人々程挫折経験が多い，否，「挫折感が強い」と云う解釈が可能なのではないだろうか[2)]。



図－2　男女・学歴別挫折経験

要約すると，男性ほど，高学歴者ほど，或は経営者層ほど挫折感が強いと云うこれまでの結果が示唆しているのは，「期待を抱いてしまうカテゴリーの人間の数に比して，実際の社会的資源（学歴や職業的地位など）が稀少であり，その為そうしたカテゴリーの人々の挫折感がそもそもそうした期待を抱きにくいカテゴリーの人達に比べて高くなっている」と云う事だとも考えられるのである。



図－3　男女・世代別の挫折経験

更に，最初に確認した様に「挫折せる者は益々挫折す」と云う傾向がはっきりと存在していた。この事を，「経験」や「事実」と云った語彙で語らずに「期待水準」の視角から読み直すと，次の様になる。即ち，男性や高学歴と云った「有利な」位置にいるものは期待を抱かされてしまい（煽られてしまい），社会的相対的に見れば決して恵まれない地位・状況では無いにも関らず，常に不満足な感覚を抱いてしまうのである。戦後の日本社会に於いて，期待や欲望を煽る文化ばかりが支配的になっており，過度の期待や，或は失望や挫折と云った経験による感情を cool down させる文化が貧困であると指摘される事もあるが[3]，ここでの結論もまた，そうした見方に若干の支持を与えているかもしれない。

こうした観点から見ると，短大・高専学歴者と大学・大学院学歴者はかなり対照的な傾向を示している。しばしば用いられる，初等学歴(義務教育)・中等学歴（高等学校）・高等学歴の学歴３分類では，両者は同じ高等学歴カテゴリーに入れられる事が多いけれども，希望する社会的地位や職種と云ったものにはかなりの相違がある事が推測される。つまり両者の将来に対する期

待の種類や水準はかなり異質な筈である。男性の場合はこのカテゴリーの該当者は決して多くないが，それに比べて女性の場合は短大進学者はかなりの割合を占める。そして，短大に進学するか4年制大学に進学するかではその後の職業キャリアやライフコースへの期待が異なってくると考えるのは自然である。III節にて学歴別の差が有意になった進学挫折・昇進挫折について短大・高専学歴者と大学・大学院学歴者を比較してみると，先ず進学挫折については，全体では短大・高専学歴者がカテゴリー中最低値を示している。逆に，大学院学歴者は半数以上の者が希望した進学がかなわなかったと答えている。男女別で見るとやや傾向が異なってくるが，女性の大学学歴者を除いてはこの傾向が存在していると見る事が出来る。女性の大学学歴者で進学挫折比率が低いのも，女性にとっては未だ4年制大学に進学する事はかなり特別な事であり，進学したと云う事でもって既に期待が充足されたのだと考えれば納得が行く。

こうした期待水準の違いは，もう一つの項目，昇進に関る挫折を見れば明らかである。ここでは男女を問わず，大学以上の学歴者の挫折感が強く，それに対して短大・高専学歴者はカテゴリー中最低値を示しているのである。言う迄も無いが，短大・高専学歴者の方が昇進に関して恵まれているのではない。彼らはそもそも会社や役所での昇進に対してそれ程の期待を抱いていないのである。それに対して大学（院）学歴者は，その高学歴故に他のカテゴリーよりも「出世」に対する期待が強まり，高い期待が充足されない比率が高まってくるのである。

以上，十分ではないデータと大雑把な分析によってかなり勇み足の議論を展開して来たが，しかし，こうした「挫折感」に関る／を巡る問題と云ったものが，社会的資源の不平等に関る／を巡る問題とはかなり異質なものであると云う事は多少なりとも明らかに出来たのではないだろうか。この異質性は二つの事を意味している。即ち，一つは，ここでの「挫折感」と云ったものに焦点を合わせている限りは，「客観的な」社会的不平等の問題とは切り結びにくいと云う事，そしてもう一つは，それ故に，「客観的な」社会的不平等

の問題とはまた別に，こうした「挫折感」感情の社会的なケア・マネジメントの方法が考えられてしかるべきであると云う事である[4]。いずれかが本当の社会的問題・課題であり，他方は擬似問題に過ぎないと云う事ではない。それぞれ別個の二つの社会的問題が存在しているのである。

本稿では時間的・力量的制限から，非常に単純な分析しか行えなかったが，今後の課題としては，本人の属性のみならず出身家庭・両親の属性との関連や，種々の社会意識・階層意識との関連などを探る事が考えられるだろう。

註

1）進学挫折，就職挫折，昇進挫折，不本意転退職，再就職挫折の各項目の因子負荷量（VARIMAX 回転後）は，第1因子でそれぞれ 0.740，0.699，0.520，−0.143，0.201，第2因子で−0.067，0.055，0.398，0.786，0.684 である。この2因子による最終的共有性推定値は 2.62 となっている。

2）進学に於ける挫折に限って言えば，選択に直面する機会の数の違いが影響していると云う事も考えられなくはない。小学校以下の「お受験」を無視して考えても，中学卒の人が直面したかも知れない進学選択機会は，中学受験と高校受験の多くて2回，それに対して大学院卒の人が直面したであろう進学選択機会を同様に数えると，中学受験・高校受験・大学受験・大学院進学の4回になる（勿論これは平均的に想定されるイメージでしかなく，中高一貫性の進学校の場合等には変化してくる）。こうした進学選択の機会・回数が多いと，そのいずれかに於いて不本意進学をしている蓋然性も高くなると云う，単純な選択機会回数の違いの影響も完全に否定出来る訳ではない。

3）こうした議論については例えば大村英昭［大村，1997］や竹内洋［竹内，1995］が参考になる。

4）苅谷剛彦が教育に於ける「客観的な」不平等と「差別や不平等」の「意識や感情」について興味深い議論をしている［苅谷，1995］。

参考文献

大村英昭　1997『日本人の心の習慣　鎮めの文化論』NHK 出版.
苅谷剛彦　1995『大衆教育社会のゆくえ　学歴主義と平等神話の戦後史』中央公論社.
厚生省　1998『平成10年度版　厚生白書』ぎょうせい.

Merton, Robert K., 1946 *Mass Persuasion: The Social Psychology of a War Bond Drive*＝1973『大衆説得』，柳井道夫訳，桜楓社.
――― 1949 *Social Theory and Social Structure* (revised 1957), The Free Press＝1961『社会理論と社会構造』，森東吾他訳，みすず書房.
落合恵美子　1994『21世紀家族へ』(新版 1997) 有斐閣.
竹内　洋　1995『日本のメリトクラシー　構造と心性』東京大学出版会.